

勝利の秘訣

2009.4.21(火)

ベック兄メッセージ(メモ)

引用聖句

コリント人への手紙・第一 1章4節から9節

私は、キリスト・イエスによってあなたがたに与えられた神の恵みのゆえに、あなたがたのことをいつも神に感謝しています。というのは、あなたがたは、ことばといい、知識といい、すべてにおいて、キリストにあって豊かな者とされたからです。それは、キリストについてのあかしが、あなたがたの中で確かになったからで、その結果、あなたがたはどんな賜物にも欠けるところがなく、また、熱心に私たちの主イエス・キリストの現われを待っています。主も、あなたがたを、私たちの主イエス・キリストの日に責められるところのない者として、最後まで堅く保ってください。神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。

コリント人への手紙・第一 15章1節から4節

兄弟たち。私は今、あなたがたに福音を知らせましょう。これは、私があなたがたに宣べ伝えたもので、あなたがたが受け入れ、また、それによって立っている福音です。また、もしあなたがたがよく考えもしないで信じたのでないなら、私の宣べ伝えたこの福音のことばをしっかりと保っていれば、この福音によって救われるのです。私があなたがたに最も大切なこととして伝えたのは、私も受けたことであって、次のことです。キリストは、聖書の示すとおり、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また、聖書に従って三日目によみがえられたこと、

コリント人への手紙・第一 15章55節

「死よ。おまえの勝利はどこにあるのか。死よ。おまえのとげはどこにあるのか。」

コリント人への手紙・第一 16章13節、14節

目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい。いっさいのことを愛をもって行ないなさい。

今日のテーマ、題名は、「勝利の秘訣」、或いは「勝利の生活への道」です。最後に読みました13節と14節は、まさにそういう呼びかけでしょう。

コリント人への手紙・第一 16章13節、14節

目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい。いっさいのことを愛をもって行ないなさい。

とあります。

このみことばでパウロは、コリントにいる兄弟姉妹に、「勝利の生活への道」を示しています。彼らにはそれが必要だったからです。というのは、コリントにいる兄弟姉妹たちが「勝利の生活への道」に覚醒されていなかったからです。

パウロは「いわゆるキリスト教」の教えを伝えようとしたのではありません。彼の手紙全体は、コリントにいる兄弟姉妹に自分たちの状態に対して、主が与えてくださった答えそのものでした。そのコリントにいるイエス様を信じる人々が、「圧倒的な勝利者」ではなく、あらゆる点において勝利を失っていたのです。つまり「敗北者たち」の集いでした。けれど、私たちがまた多くの挫折を知っているのではないのでしょうか。私たちがたびたび、イエス様の名誉を汚してしまっているのではないのでしょうか。また私たちは、しばしば主の働きの妨げとなっているのではないのでしょうか。

二つのことが明らかでしょう。即ち、

あらゆる信者は、約束されている勝利の生活を営みたいと切に願っています。もしそうでなければ、救われていないということになるのではないのでしょうか。

もう一つ、聖書は、この「勝利の生活」がいかにして私たちに分け与えられるかを、はっきり示しています。即ちそれは「敗北」の生活ではなく、「勝利の生活を送ること」が主のみこころであり、目標であることを意味しているのです。

イエス様は、次のように言われました。

ヨハネの福音書 8章36節

「ですから、もし子があなたがたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。」

本当の自由を得ることは、主のみこころです。「本当の自由」を与えることができるお方は、もちろんイエス様だけです。

パウロは、ローマにいる兄弟姉妹に同じことについて書いたのです。

ローマ人への手紙 6章14節

「というのは、罪はあなたがたを支配することがないからです。なぜなら、あなたがたは律法の下にはなく、恵みの下にあるからです。」

同じくローマ書8章37節、よく引用される箇所です。

ローマ人への手紙 8章37節

「私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。」

「自分は立派になった」、「強くなった」ではないのです。それは「私たちが愛しておられるお方によって」です。

コリント第二の手紙 2 章 1 4 節、パウロは、またコリントにいる人々に書いたのです。何年後だったかはっきり分かりませんが、彼は何度もコリントにいる人々に手紙を出したでしょう。しかし全部なくしてしまったのです。残されているのは、第一の手紙と、第二の手紙だけなのです。けれども、本当はもっと書いたはずです。

コリント人への手紙・第二 2 章 1 4 節

しかし、神に感謝します。神はいつでも、私たちが導いてキリストによる勝利の行列に加え、至る所で私たちを通して、キリストを知る知識のかがりを放ってくださいます。

「神はいつでも」、「たまにはありません。」「至る所で」、「ある所だけではありません。」このみことばこそ、勝利を意味しているのではないのでしょうか。

今日私たちは、このコリントにいる兄弟姉妹に向けたパウロのことばについて、少しだけ考えたいと思います。前に読んでいただきましたコリント第一の手紙の 1 6 章 1 3 節と 1 4 節をもう一度読みます。

コリント人への手紙・第一 1 6 章 1 3、1 4 節

目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい。いっさいのことを愛をもって行ないなさい。

ここでは、気持ちの良い忠告ではなく、それ以上のことが取り上げられています。即ち福音が、「喜びの訪れ」が、宣べ伝えられています。つまり次のように言われています。

「生けるまことの神」は、あらゆる信者が「勝利の生活」を送ることができることを可能にしてくださいました。私たちに主の命令を実行することのできる力をお与えにならずには、いかなる命令をもお与えになりません。私たちは善意の忠告であったとしても必要としないのです。私たちが必要とするのは「福音」であり、「イエス様」です。私たちが何をなすべきかを、私たちに語ってくれることは大切かもしれませんが、最も大切なことは、私たちが「命令に従う力」を誰が与えてくれるのかということです。

この聖句で問題になっていることは、理論ではなく実践そのものです。これらの聖句は、ほとんど部隊長の命令のような響きを持っています。将軍が指令し、最終的に統括します。これらの事がらが尊重されるなら勝利が確実であるということを、将軍が知っているからそのように行なうのです。「目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい。いっさいのことを、愛をもって行ないなさい」と。

イエス様に会った兄弟姉妹は、誰でもイエス様の兵卒です。パウロは、愛弟子であるテモテに書いたのです。パウロが殉教の死を遂げる前の、最後の手紙です。

テモテへの手紙・第二 2章3節、4節

キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともにしてください。兵役についていながら、日常生活のことに掛かり合っている者はだれもありません。それは徴募した者を喜ばせるためです。

初代教会の兄弟姉妹の切なる願いは、「主をお喜ばせすること」でした。

コリント人への手紙・第二 5章9節

そういうわけで、肉体の中にあると、肉体を離れていようと、私たちの念願とするところは、主に喜ばれることです。

今日、私たちは新たに、真剣に自分自身に問うてみましょう。

私たちのためにご自身のいのちをお与えになったお方に喜んでいただくことが、私たちの心からの願いでしょうか。イエス様を信じることだけではなく、本当にイエス様に喜んでいただきたいという願いがとても大切です。この願いを持っていない人は祝福されないし、用いられません。

私たちは今日、私たちが恐ろしい戦いの中に放り込まれているという事実を新たに認識したいと思います。信じる者にとって最も大切な一つの箇所は、エペソ書の6章でしょう。ここでパウロは、エペソにいる兄弟姉妹を導くために、助けになるために書いたのです。ここに、一つの戦い、格闘について書いてあります。

エペソ人への手紙 6章12節

私たちの格闘は血肉に対するものではなく、主権、力、この暗やみの世界の支配者たち、また、天にいるもろもろの悪霊に対するものです。

「血肉」とは、人間です。この目に見える世界です。

初代教会の兄弟姉妹は、それをはっきり認識したのです。私たちの格闘は悪霊に対する戦いだ。

けれど、イエス様に感謝しましょう。なぜなら、最後の勝利は既に獲得されているからです。イエス様はご自身の死とよみがえりを通して、悪魔の力に対する完全な勝利を獲得してくださいました。イエス様は、父なる神の右の座に、座しておられます。イエス様の獲得された勝利を、すべての信じる者の生活の中で明らかにさせるために、「聖霊」が遣わされました。この「御霊」に働く余地が与えられますと、私たちは「主の勝利」にあずかります。それは、私たちの勝利ではなく、「イエス様の勝利」です。「勝利者」は、「イエス様だけ」であられます。

この勝利にあずかるため、私たちは何をしなくてはならないのでしょうか。みことばの中でパウロは、前に読んだ箇所を見ても分かりますが、五つのことに言及しています。

コリント第一の手紙 16 章です。

コリント人への手紙・第一 16 章 13 節、14 節

目を覚ましていなさい。堅く信仰に立ちなさい。男らしく、強くありなさい。いっさいのことを愛をもって行ないなさい。

私たちは、それをほかのことばで、次のようにも言うことができるのではないかと思います。

第一番目、常に警戒し、用心すること。

第二番目、信頼によって強められること。

第三番目、成長して、完全におとなになること。

第四番目、主にだけ拠り頼み、依存すること。

第五番目、すべて愛をもって行なうこと。

* 第一番目。第一の明確な命令は、「目を覚ましていなさい」という命令です。

「あなたがたは目を覚ましていなさい」。常に警戒し用心していることが大切です。私たちは、見回りをしている兵士を連想することができます。目を覚ましていることは最高の掟です。なぜなら、敵はどんな瞬間でも攻撃をしかけて来るからです。これは、私たち全ての者に当てはまります。

三つの敵が私たちに対立しています。即ち、

この世、この目に見える世界。

肉。自分の性質。

神の敵である悪魔。

私たちが絶えず警戒し、用心していないと、これら三つの強力な敵が私たちに襲いかかるのです。私たちは、これらの敵について何を知っているのでしょうか。即ち今話しましたように、まず私たちを取り巻くこの世について。次に、私たちのうちに住む肉について。そして、私たちを攻撃する悪魔についてです。

私たちの最初の敵は、私たちを取り巻く「この世」です。

コリントという町は、当時、ギリシャの最も重要な都市であり、商業と教育の中心地でした。コリントは豊かで美しく魅力的でした。けれど他方において、罪と誘惑に満ちた所でもありました。コリントの兄弟姉妹は、ようやく少し前に信仰に導かれました。大部分は偶像礼拝者でしたし、道徳的に墮落した生活を送っていました。

けれど、彼らはイエス様との出会いを通して、「自分たちの罪が赦されている」ということを知り、大いに喜ぶことができるようになりました。「今からはイエス様のために生きたい」ということが、彼らの切なる願いでした。しかし彼らを取り巻くこの世は、彼らを再び虜にし、無力にし、麻痺させるように、あらゆる手段を使って誘惑しました。

私たちが今、コリントにいようが、ニューヨークであろうが、ロンドンであろうが、ベルリンであろうが、東京であろうが、どこで生活しようが至る所で、私たちを取り巻くこの世は、私たちを盲目にし、惑わし、「快適な生活を欲するように」と誘惑します。ヨハネの極めて重大なみことばが、私たちにも当てはまります。

ヨハネの手紙・第一 2章15節から17節

世をも、世にあるものをも、愛してはなりません。もしだれでも世を愛しているなら、その人のうちに御父を愛する愛はありません。すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。世と世の欲は滅び去ります。しかし、神のみこころを行なう者は、いつまでもながらえます。

私たちの第二の敵は、私たちのうちに宿る「肉」です。

ここで「肉」とは、根本的に滅び切っていない、改善されていない私たちの「生まれつきの罪の性質」を意味しています。パウロはそのことを知っていて、次のように告白しました。

ローマ人への手紙 7章18節

私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。

これはパウロの未信者としての告白ではありません。イエス様に出会って救われた、主に仕えているパウロの告白です。結局、「私は駄目」と。

そして最後に、パウロはどうにもならず、次のように叫んだのです。

ローマ人への手紙 7章24節

私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。

これが終わりではないとは、何と素晴らしいことでしょう。更に、パウロは重荷が下ろされた気持ちで、次のようにことばを続けています。

ローマ人への手紙 7章25節前半

私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。

イエス様のうちにこそ、「解放」があります。

何としばしば私たちは、私たちの罪深い性質の虜になることでしょう。これは、私たちが「肉の罪」、或いは「霊の罪」を犯す時に明らかになります。

肉の罪は、ガラテヤ書の中でたとえあげられています。みな知っている箇所です。

ガラテヤ人への手紙 5章19節から21節前半

肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。

けれど「霊の罪」は更に巧妙なのではないでしょうか。即ち、誇り、批判精神、不寛容などです。

私たちの第三の敵は、私たちを攻撃する「悪魔」です。

「悪魔」は、私たちの本当の敵であり、彼は強大な力を持っていて、私たちひとりひとりを不信仰にしようと狙っています。サタンはどんな代価を払っても、私たちをわざわざに陥れる決心をしています。私たちが「勝利の秘訣」を知らないなら、悪魔は私たちを手玉に取ります。

悪魔はいろいろな顔を持っています。ある時には、「ほえたけるしし」として誘惑します。ペテロはそのような表現を使いました。

ペテロの手紙・第一 5章8節後半

あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。

「あなたがた」、信じる者に書かれたことばです。

けれども、悪魔はここで書かれているように、「ほえたけるしし」のようだけではなく、ある時は、「光の天使」として人を誘惑しようと思っているのです。コリント第二の手紙の11章を読むと、次のように書かれています。

コリント人への手紙・第二 11章14節後半

サタンさえ光の御使いに変装するのです。

とあります。

ですから、私たちが「悪魔」の戦術をよく知ることがどうしても必要です。パウロは、次のように書いたのです。

コリント人への手紙・第二 2章11節後半

私たちはサタンの策略を知らないわけではありません。

私たちは、どうすれば悪魔に抵抗することができるのでしょうか。またその結果、悪魔が逃げ出さなければならぬことになるかを学ばなければなりません。

この世、肉、そして悪魔自身は、私たちを少しも休ませることをしません。私たちは、この悪魔を警戒し、用心していないと、わざわざとなります。ですから、最も大切な命令は、「目を覚ましていなさい」、「悪魔があなたがたを陥れないように注意しなさい」という命令です。

誰が日々、勝利を経験しているのでしょうか。私たちの最初の答えは、次のような人です。

- ・いつも警戒し、用心している人。
- ・目を覚ましている人。
- ・眠りに陥らない人です。

*第二番目。 信頼によって強められることです。

「堅く信仰に立ちなさい」。これもまた明白な命令です。似ているみことばは、コリント人への手紙・第一 15章58節

ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。

ここで大切なことは、信じることだけではなく、「信仰に堅く立つ」ことです。

ある新聞に、一冊の本を読む学生の写真が出ていました。彼は眼鏡をかけていて、それによってかなり学識があるように見えました。そこに書かれている見出しはとても面白いものでした。「成功する人は、勉強を始める人ではなく、勉強を始めて、かつ、本当にその勉強を続けることのできる人です」と。

私たちの場合はいったいどうでしょうか。私たちはしばしば諦めてしまうのではないのでしょうか。戦いが一層激しくなり、攻撃もますます度を加え、絶望の可能性が非常に大きくなると、私たちはみな内面的に疲れてしまう危険にさらされます。

けれど私たちは簡単に放棄してはなりません。というのは、堅く立ち、動かされることなく、いつも主のわざに励むようにと命令されているのであり、それは「主によって可能」であるからです。

これらのみことばは、よみがえりの書であるコリント第一の手紙15章の終わりにも記されています。この書において、「福音の内容」が何であるか。また、「イエス様の復活の事実と栄光」が何であるか、詳しく述べられています。それと同じように、「信仰によって」イエス様と結びついている者の「復活」が述べられています。更に、私たちの「主イエス様の再臨」、また「死と黄泉に対する勝利」も言及されています。

堅く立つこと、動かされないことは、どうしても必要です。その際、そこにとどまり、堅く立ち、動かされないことを可能にする、この「内面的な確信の土台」はいったい何でしょうか。それは、「主のみことば」です。私たちが拠り頼むべきものは、私たちの「主の大いなる約束」です。

「信仰に堅く立ちなさい」と言われるとき、私たちはいつも、私たちの「信仰の唯一の土台」が「主のみことば」である、ということをはっきり知っておかなければなりません。私たちが考えたり、感じたり、真理とみなしたりするものではなく、「主のみことばが語られること」こそ、徹底的に大切なことです。「それだけ」が、「私たちの信仰の土台」でなければなりません。

パウロは、愛弟子であるテモテに、次のように書いたのです。

テモテへの手紙・第二 2章15節

**あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じる
ことのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。**

とあります。

人は、曲がって生きること、即ち聖書を自分勝手に解釈することもできます。いわゆる聖書批判全体は聖書の曲解です。私たちは決して、聖書の一箇所だけを聖書全体の関連から取り出して、それによって私たちが好ましいと思うことを基礎づけようとすることをしてはなりません。聖書全体は何と言っているかと、絶えず覚えるべきではないでしょうか。私たちが主のみことばを判断すべきではなく、「主のみことば」こそが、私たちをさばき、私たちを導きたいと望んでおられるのです。

信仰に堅く立ちなさいという表現で述べ伝えられているもう一つの別の側面は、つまり「主に信頼し続けなさい」ということです。誘惑や試練によって屈服させられないようにしなさい。いろいろな困難や悩みがあなたの上に襲いかかり、あなたが理解できないような苦しみに耐えなければならないとき、「主に対するあなたの信頼」を失わないようにしましょう。

悪魔の攻撃目標は、私たちの「信仰」です。私たちが主に信頼しないようにと、悪魔はあらゆる代価を払って誘惑します。私たちは、私たちの主を多くの点において理解できません。私たちは、「なぜ、主がこのことや、あのことをお赦しになるのか」と、全く分かりません。どんなに努力しても、私たちは背後にある意味を少しも理解できません。しかし、それにも関わらず、信頼に堅く立つことが大切なのです。主は、主がなさること、お赦しになることをご存じです。「私たちの信頼の土台」は、主の「みことば」であり、主の「み約束」です。

最も素晴らしい約束の一つは、ヘブル書に書かれています。

へブル人への手紙 13章5節後半から6節

主ご自身がこう言われるのです。「わたしは決してあなたを離れず、また、あなたを捨てない。」そこで、私たちは確信に満ちてこう言います。「主は私の助け手です。私は恐れません。人間が、私に対して何ができましょう。」

「主ご自身がこう言われるのです」。大切なことはそれなのです。「そこで」、即ち「唯一の土台なるものは主のみ約束」です。

私たちは次のようなときに、主の勝利にあずかることができます。

まず第一に、いつも警戒し、用心して眠り込まないときです。

第二に、信頼によって強められるときです。その土台は「主の真実なみことば」です。主のみことばに基づいて、私たちは信頼することができます。主は決して、私たちを失望させることはなさいません。

* 第三番目。成長して、完全におとなになるときです。

「男らしくありなさい」という表現は、成長しておとなになること、つまり本当の意味で成長することを意味しています。

ここで、次のような問いが生まれてきます。

- ・私たちは、もうどれほど長い間、主のものとなっているのでしょうか。
- ・私たちは、霊的な領域において、まだ幼いのでしょうか。

コリント第一の手紙13章11節で、パウロはコリントにいるなかなか成長しなかった兄弟姉妹に書いたのです。

コリント人への手紙・第一 13章11節

私が子どもであったときには、子どもとして話し、子どもとして考え、子どもとして論じましたが、おとなになったときには、子どものことをやめました。

これは、パウロの告白です。私たちの場合はどうでしょうか。私たちも子どものことをやめたのでしょうか。未成熟のしるしは、コリント第一の手紙3章3節によると、ねたみや争いです。

同じくエペソにいる兄弟姉妹に、パウロは勧めました。

エペソ人への手紙 4章13節

ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

大切なことは、信仰の一致に達すること。御子イエス様に関する知識の一致に達するこ

と。完全におとなになることです。けれど、これはどうすれば可能なのでしょうか。

- ・どうすれば、私たちはいつも警戒し、用心していることができるのでしょうか。
- ・どうすれば、私たちは信仰によって強められることができるのでしょうか。
- ・どうすれば、私たちは成長することができ、もはや幼子ではなくおとなとして信仰生活を送ることができるのでしょうか。

私たち全ての者にとって明らかなことは、このことが「自分の力では絶対にできない」ということです。

私たちがなぜ絶えず挫折するのか、その根拠は次のようなことです。即ち、私たちは、イエス様がご自身の勝利の生活を私たちの中に生かすことがおできになるために、イエス様に働く余地をお捧げすることが必要なのですが、その代わりに自分で勝利の生活を送ろうとしてしまうのです。私ではなく、「私のうちにおられるキリスト」。これこそ、勝利の秘訣です。

すべての挫折は、私たちが主の御霊の導きと働きに従う代わりに、自分の力でしようとしたということを示しています。私たちが挫折するのは当然のことです。私たちはがっかりして悲しみます。イエス様はがっかりなさるということはありません。それは当然です。というのは、私たちはとても「不可能」なことを自分でしようとするからです。

誰ひとり、主に喜ばれる生活を送ることはできません。それは、全く不可能なことです。誰ひとり、自分の力で勝利の生活を送れるほど強い者ではありません。けれど私たちへの命令は、次のことです。「強くありなさい」。

また、要求されているのは四番目です

* 第四番目。「イエス様にだけ頼り頼み」、「依存する」ことです。

「イエス様にだけ」頼り頼み、依存すること。このことが私たちの標語であるなら、幸いです。なぜなら、自分の力でしようすることは、全く無意味だからです。

私たちは、「この世」と「この世の霊」に影響されずにこの世で生活することは、絶対にできません。私たちは、私たち自身の堕落した性質を直そうとしたり、克服したりすることは絶対に出来ないのです。私たちは、自分の力で悪魔に抵抗して勝利を勝ち取ることも、絶対に出来ません。ですから、パウロはエペソ書に次のように書いたのです。

エペソ人への手紙 6章10節

終わりに言います。主にあって、その大能の力によって強められなさい。

聖書のどこにも、頑張って、一生懸命になって自分の力で強くなりなさいと書いてないのです。「主にあって、強められなさい」。「主イエス様の大能の力によって強められなさい」と、聖書ははっきり語っているのです。

更に、パウロはことばを続けて、「神の武具を身に着ける」ことが、「この戦いで勝利者」となるためにどうしても必要であることを記しています。

- ・私たちは、腰に「真理の帯」を締められなければならない。
- ・私たちは、「義の胸当て」を胸に着けなければならない。
- ・私たちは、「平和の福音」を宣べ伝える備えをしていなければならない。
- ・「信仰の大盾」が、意識的に用いられなければならない。
- ・必要不可欠なものは、「御霊の与える剣としての主のみことば」です。

誰ひとり、敗北を帰する必要はありません。私たちが挫折するのは、私たちが「自分の力」で行なったからです。悪魔は、私たちのちっぽけな試みを見てあざ笑います。決して「自分に拠り頼むことをしない」ようにしましょう。

私たちはどうすれば主の勝利にあずかることができるのでしょうか。

今話しましたように、

一番目、いつも警戒し、「用心していること」によって。

二番目、神のみことばに信頼し、「主に拠り頼むこと」によって。

三番目、子どものことをやめて、おとなに「成長すること」によって。

四番目、いかなることがあっても、決して「自分自身をあてにしないこと」によって。

最後に、「もう一つの大切なこと」があります。

* 第五番目。すべて「愛をもって行なうこと」です。

コリント人への手紙・第一 16章14節

いっさいのことを愛をもって行ないなさい。

私たちが「愛によって」、しかも「主の愛によって満たされる」ことが、すべてにまさって大切なことです。

「主なる神の愛」は、私たちの生活の中で、明らかにされなければなりません。

「主の愛」は、私たちの行ないによって、示されなければなりません。

「主の愛」は、私たちのことばの中で、聞かれなければなりません。

けれど、それがいかにして可能なのでしょうか。答えは、ローマ書5章5節です。

ローマ人への手紙 5章5節後半

なぜなら、私たちに与えられた聖霊によって、神の愛が私たちの心に注がれているからです。

いつか与えられるのではないのです。事実として「もう与えられている」と、パウロは

書いたのです。このみことばによると、「新しく生まれ変わった者」は誰でも、「聖霊」によって「神の愛を持つ者」です。「聖霊」は、全ての信仰者に与えられており、「御霊の実は愛である」と聖書は記しています。

人間の心の中に神の愛があります。イエス様を受け入れることによって、「神の愛」そのものが与えられます。主の愛で満たされるためには、私たちは「聖霊で満たされ」なければなりません。あらゆるキリスト者の主な特徴は、この「愛」であるべきです。

イエス様は、次のように言われました。最後にこれを読んで終わります。

ヨハネの福音書 13章34節、35節

「あなたがたに新しい戒めを与えましょう。あなたがたは互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、そのように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。もしあなたがたの互いの間に愛があるなら、それによって、あなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。」

私たちは今まで、「勝利の生活」、「勝利の秘訣」について考えてきました。私たちは今、それがいかになされるかを知っているでしょう。

けれど今ここで大切なことは、この知識を「実践に移す」ことです。私たちにその覚悟があるなら、私たちの生活は変えられるのであり、私たちは大いなる喜びに満たされ、イエス様は、私たちの主の名誉と栄光のために、主に仕えるようにお用いになるに違いありません。

了